

英語科教員の成長と教員養成課程の課題

— 本学での教員免許状更新講習、「英語の教え方教室」勉強会を通して —

中 井 弘 一

Professional Competence Development of English Language Teachers and Challenges Teacher Training Courses Face

Hirokazu Nakai

抄 録

昨今、小中高教員の資質向上に向けた施策が次々に検討され、実施されている。文部科学省は、大学4年間で必要単位を修得すれば教員免許を取得できる現行制度の変革を検討し始めた。教員免許状更新講習も3年目を迎え、教員の資質向上は喫緊の課題と捉えられている。本稿では、教員免許更新制度やベネッセの学習調査による授業実態などとともに、本学での教員免許状更新講習や「英語の教え方教室」勉強会を通して直接得た学校現場の現状を踏まえ、求められる英語科教員の資質能力向上とは何か、資質能力の向上を図るためどう成長すべきか、また教職課程設置大学は教員養成をどうとらえていくべきかを論考する。

キーワード：英語科教員、資質能力向上、自己省察、授業デザイン、教員免許更新

(2011年9月27日受理)

Abstract

Several government measures to improve teacher's professional competences are being planned and carried out now. MEXT has started to reconsider the present way of acquiring the regular teacher certificate, which presently is attained by completing the teacher training curricula at a 4-year higher education institution. In fact, the teacher certificate renewal system started three years ago. This paper describes the improvement of teacher's qualifications and abilities, and discusses how teachers of English should cope with their professional competence development, and what measures teacher training courses should take.

Key words: English language teacher, development of professional competences, lesson design, teacher certificate renewal system, self-reflection

(Received September 27, 2011)

1. はじめに

昨今、教員の資質向上に向けた施策が次々に検討されたり実施されたりしている。文部科学省は、大学 4 年間で必要単位を修得すれば教員免許を取得できる現行制度を変革し、正規教員として本格的に教壇に立つには教職大学院修了など修士課程レベルの免許取得を求める新制度の検討を始めた。また、廃止の方向であると思われた教員免許状更新講習は、政権のぐらつきでそのまま継続されている。「この春に教員免許更新制に基づき免許の有効期限を迎えた全国の教員のうち、98 人が免許を失効した」(朝日新聞 8. 6) と文科省は平成 23 年 8 月 5 日に発表した。対象者約 9 万 5 千人の 0.1%にあたる。このような教員免許更新制や免許取得資格についての変革は学校現場で日々の職務に追われている教員を戸惑わせているが、知識基盤社会において社会人として基礎能力を有する生徒を育成する教員の資質能力の向上が何より必要だという認識があると思われる。特に英語科教員には、国際共通語としての役割を担う英語をどう指導していくのか、その責務が問われ出している。

その一環として平成 23 年 7 月 13 日には、「外国語能力の向上に関する検討会」(座長：吉田研作上智大学外国語学部英語学科教授・上智大学一般外国語教育センター長) がまとめた「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」が文科省より発表された。

提言 1. 生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する

提言 2. 生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る

提言 3. ALT、ICT 等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす

提言 4. 英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る

提言 5. グローバル社会に対応した大学入試となるよう改善を図る

来年度から中学校で新学習指導要領が施行され、高等学校でも再来年度から施行される。現在、非常に多くのことが要求される環境が教員を取り巻いている。

こうした状況下で、本学では教員免許状更新講習や現職英語科教員を対象とした「英語の教え方教室」勉強会を実施してきた。これらの教員免許状更新講習での受講教員の要望、受講コメントや勉強会参加教員からの英語教室の状況や指導の工夫、課題などの発表を通して、学校現場の実状をうかがい知ることが出来た。

本稿では、求められる英語教員の資質向上とは何か、教員免許更新制度などの資質向上施策やベネッセの学習調査による中学高校での授業実態などを俯瞰して考察するとともに、本学での教員免許状更新講習や「英語の教え方教室」勉強会を通して直接得た学校現場の現状を踏まえ、英語科教員が資質向上にどう向き合うべきか、また教職課程を設置する大学として教員養成をどうとらえていくべきかを論考する。

2. 求められている英語科教員の資質能力

「はじめに」で述べた教員免許制度のあり方を検討している中央教育審議会 教員の資質能力向上特別部会が平成 23 年 1 月 31 日に発表した「教職生活の全体を通じた 教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）」において、

- ・学校現場の多忙化や学校を取り巻く社会状況の変化により、いわゆる「学びの共同体」としての学校の機能が十分に発揮されていない
- ・教員自身が主体的・自発的学習者として、常に学び続ける存在であることが一層必要
- ・一斉指導による学びからワークショップ型の協働的な学びや、ICT を用いた各自の習熟度に合わせた個別学習、子どもの意見を先生にフィードバックするコミュニケーション型の学び等をより重視する方向へと転換する必要

などの課題を取り上げた。

酒井ら（2011）は「英語科教員の採用、研修、評価の動向」「英語教師の資質能力」（『英語教師の成長 求められる専門性』第 3 章・4 章）において、JACET 教育問題研究会が 60 の教育委員会の英語科教員採用担当指導主事に回答依頼をし、21 名から得た回答の調査結果をまとめている。

表 1 採用したい英語科教員像

（単位：％）

表 1 人物について	
問題に対して柔軟に対応できること	39.7
明るいこと	23.8
プラス志向であること	21.4
落ち着きがあること	10.3
好奇心が強いこと	4.8
表 2 教職として必要な資質・能力	
教育に対する情熱と熱意があること	50.0
他の教員と連携する協調性があること	19.0
学習者のニーズを理解できること	19.0
説明や指示を明確にできること	11.9
教科外活動（部活動など）に対する意欲があること	0.0
表 3 授業場面で必要な資質・能力について	
わかりやすい授業を展開できること	39.7
英語コミュニケーション活動の技術を持っていること	31.0
活気のある授業ができること	16.7
生徒の興味・関心を引く話題や特技を持っていること	10.3
適切な声量で授業ができること	2.4
表 4 英語教授に関する知識について	
英語の語学的知識をもっていること	34.1
主な教授法・教授理論の知識を持っていること	24.6
学習指導要領についての知識をもっていること	17.5
日本語と英語の違いについての知識をもっていること	13.5
テストと評価の方法についての知識をもっていること	10.3
表 5 国際理解教育に関する知識と教養について	
異文化コミュニケーションに関する知識を持っていること	37.3

国際情勢に関する知識や教養を持っていること	20.6
国際語としての英語の役割を認識していること	18.3
英語圏文化の背景知識を持っていること	18.3
外国での生活、研修、旅行などの体験があること	4.0
その他	1.5

表 6 英語力について

英語で授業ができること	41.3
ALT とコミュニケーションができること	33.3
「英検準 1 級、TOEFL550、TOEIC730」のいずれかを取得していること	12.7
母語話者に近い発音ができること	9.5
大学センター入試の英語問題にほぼ正確な解答が出せること	3.2

(酒井 (2011)『英語教師の成長 求められる専門性』第 3 章より作成)

これによると、学校現場を管理・指導・支援する教育委員会が最も求める教員の資質能力のトップ 5 は、①「教育に対する情熱と熱意があること」、②「英語で授業ができること」、③「問題に対して柔軟に対応できること」、④「わかりやすい授業を展開できること」、⑤「異文化コミュニケーションに関する知識を持っていること」である。トップ項目は教員の資格としての前提条件である。教育に対する情熱や熱意が感じられない教員には、どれほど専門知識や指導法の技術があっても、生徒は信頼せず、授業の教育効果は十分なものとはなり得ないだろう。

次に注目すべき資質能力は、教員の英語力である。「英語で授業ができる」が 41.3% と採用時にチェックされる大きな能力の一つとなっている。英語科教員採用試験には、1 次面接とともに一般教養、教職教養、専門教養の筆記試験の他、英語面接、英語集団討論、模擬授業などがある。「能力試験で測れる英語力」と「英語で授業ができる」は必ずしも等しいものではない。「英語で授業ができる」には、たとえば「活動などの指示や注意を、英語を効果的に使って行うことができる」レベルから「生徒に本文を暗記させるまで音読させ、その後英語で自己表現活動を行わせる指導ができる」「英語を効果的に使って内容理解の指導をすることができる」レベルまで幅広い英語活用能力が求められる。それには「わかりやすい授業を展開できる」授業デザイン力と指導技術がともなっていないと十分な効果は期待できない。

また、「異文化コミュニケーションに関する知識を持っていること」は英語授業において重要な意味を持つ。これは単に国際理解教育的な観点で捉えるものではない。言葉は文化であり、言語形成はその言葉を使う人々の思考回路や文化に基づいてなされるものである。中学・高校における英語教育は言語教育に軸足がある。英語を学習・習得しようする生徒に、英語そのものの言語的な理解一成り立ちや英語表現の日本語とは異なる考え方のおもしろさを伝えることができなければ、学習の効果は望めない。

ここに挙げてある資質能力は、採用時にチェックしたいと願う項目であるが、こうした能力を保持しているかどうかを採用試験時に的確に判断することは相当難しいことである。英語授業力には、能力試験で測れる英語力だけでなく、英語指導に関する知識や教養も必要である。なおかつ必要な授業デザイン力や指導技術は、直接生徒を指導する経験を

通じて発達するものでもある。したがって、ここに挙げられたものは、現職教員に対してこうした資質能力の向上を図っているだろうかと問い直すべき項目として一層重要な意味を持つ。教員免許更新制は一つにそこから生まれている。

3. 教員免許更新制

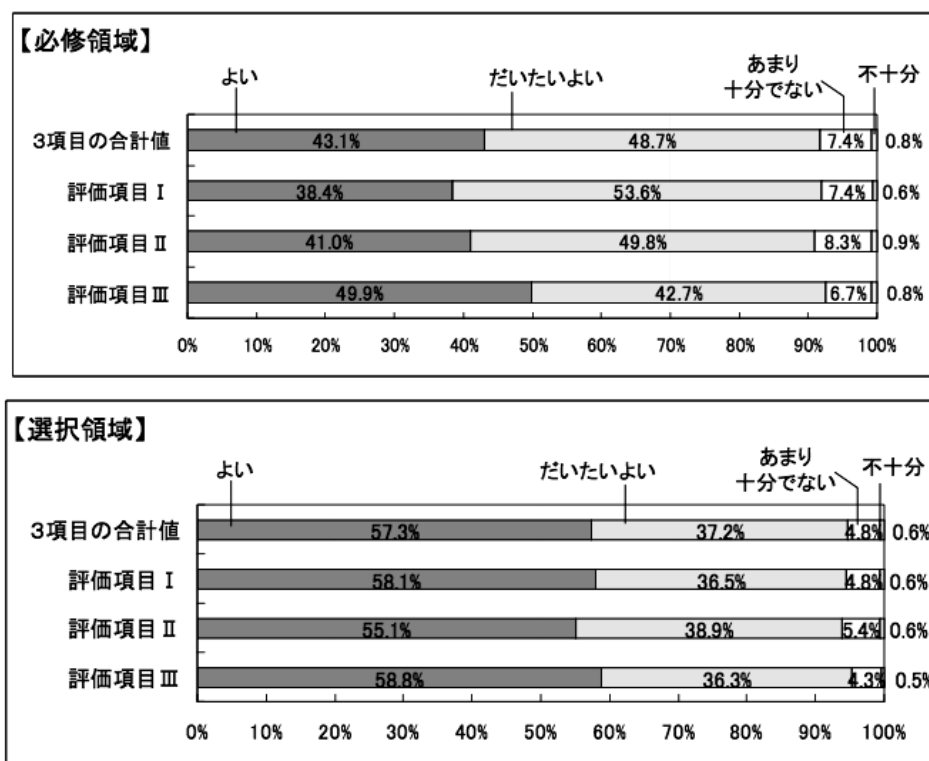
3. 1 制度の意義

平成 21 年度より実施された教員免許更新制の意図は、「一度取得した免許状を生涯有効とするのではなく、教職生活全体を通じて社会状況や学校教育が抱える課題、こどもの変化等に対応して、その時々で求められる教員としての最小限必要な資質能力が保持されるよう、定期的に必要な刷新（リニューアル）を図る」（八尾坂 2006）ことにあるのだろう。

社会構造の急激な変化への対応、学校や教員に対する期待の高まり、学校教育における課題の複雑・多様化などが制度導入の大きな要因であろうが、往時の「指導力不足教員」へのマスコミの論調を踏まえると、教員の資質能力の適格性を問い直す意図が大きく働いたことは否定できない。そのため、指導力不足と認識していない多くの学校現場教員にはこの制度の導入に戸惑いがあった。ただ、中教審教員養成部会・教員免許制度ワーキンググループの一員として本制度に関わった八尾坂は、本制度を「専門性の可算」という発想と位置づけたと述べている（八尾坂 2008）。これは八尾坂自身の教育観による考え方であろうが、教員免許更新制が「適格性の確保」という指導力不足教員の排除というネガティブな発想だけを基に生まれたものでないことを筆者も願うところである。つまり、「教員の専門性の向上（professional development）」として、本制度の意義を捉えたい。日常業務で多忙を極める教員であろうが、上述の今必要とされる資質能力を自省（リフレクション）し、自己研鑽への機会として自己の専門性の向上を図ることは何よりも大切である。個人の指導力向上へのモラルの高まりは、教員同士が学び合う、より豊かで確かな同僚性を生み出すことにつながる。これによって最大の恩恵を受けるのは、学校のステークホルダーである生徒である。また、このことが良い循環として教員への信頼となり授業の活性化が望めることになる。

文部科学省による平成 22 年度免許状更新講習の事後教科結果報告は以下のとおりである（文科省 2011）。「必修領域」は 229 大学等、517 講習、54,082 人、教科内容などの「選択領域」は、378 大学等、4,847 講習、139,663 人の受講結果である。

表 2 平成 22 年度教員免許状更新講習の事後評価結果



Ⅰ．講習の内容・方法についての総合的な評価

Ⅱ．講習を受講した受講者の最新の知識・技能の修得の成果についての総合的な評価

Ⅲ．講習の運営面（受講者数、会場、連絡等）についての評価

（文部科学省平成 22 年度免許状更新講習の事後評価結果報告より）

この結果によると、学校教員は受講してみてその成果を肯定的に捉えていることが分かる。この表から学校教員が「適格性の保持」と「専門性の加算（向上）」のどちらを基準にして本制度を肯定的に捉えたのかは定かでないが、「専門性の加算」に役立つものであったという認識はあったのではないか。そこで、本学で本年度（2011）夏季に実施した教員免許状更新講習から、教員の更新講習への期待を探る。

3. 2 平成 23 年度本学実施の教員免許状更新講習の事前アンケートより

本学では一昨年度より教員免許状更新講習（選択領域）を実施しているが、本年度夏季の教員免許状更新講習（選択領域：英語教育）は、講習 1（コミュニケーション・ルール：その基盤となる概念を考える）と講習 2（体験型ワークショップ：発音指導の見直しと音読指導の方法）の 2 講座を実施した。それぞれの講習に 32 名・33 名の英語科教員が受講した。講習 1・2 の 2 講習を受講した教員、どちらか一つの講習を受講した教員の併せて実質 46 名に、事前に「本講習受講希望理由」や「本講習に期待すること」に対して記述

式で回答を依頼した。

「本講習に期待すること」の回答で特徴的なものをいくつかとりあげる。

- ・それぞれ言語を話す人々の文化的背景がコミュニケーションを取り上げる上で重要だということを、実際に生徒に伝え、理解を促すことが出来るよう、わかりやすい事例を提示しながら説明して欲しい。
- ・「ディベートとは何か」という基本概念をしっかり理解でき、生徒にディベートのおもしろさを伝えられるような指導法をご教授お願いします。
- ・具体的な授業の進め方、具体的な「タイトル」またその選び方を学びたい。
- ・楽しく学ばせてもらえたらと思います。一緒に学ぶ方々の顔が見えるようなものなど。
- ・中学校で、英語によるコミュニケーションを授業で取り入れるには具体的にどのようなことをすれば良いのか。授業に用いることができる具体例を教えて欲しいです。
- ・どんなこともおそらくはじめて知ることばかりだろうから、今後の指導に役立つヒントを持って帰りたい。
- ・ここ数年で大きく変わりつつある英語教育に対応できるような授業を行うにあたり、自らの授業のやり方を反省し発展させていくための示唆となるような講習を期待します。
- ・授業中の音読の際の何かヒントを得ることができれば嬉しいです。
- ・この講習を受けることによって高校現場での英語の授業に活かそうであること。また指導法の工夫の仕方を知りたいと思っています。
- ・「発音・音読」は授業でも、気をつけて取り組んでいる課題であるので、これからの授業を改善していく助けとなればありがたいように思う。
- ・自らの発音指導・音読指導の方法をブラッシュアップしたいので、この点を特に期待しています。
- ・音読指導がうまく出来ていないので、授業向上のための手がかりを得られたらと思う。
- ・何か講習を受けて cheer up させてもらえたら
- ・授業で活用できるリスニングとシャドウイングの指導方法を知りたいです。授業で使えるヒントを得たい。
- ・生徒にとってわかりやすい指導ができるような指導方法を身につけたい。
- ・発音や音読の効果的な指導方法、実例
- ・発音指導のいいアイデアがあれば紹介して欲しい。
- ・実際の授業で活用できる具体的な指導法を学びたい。特に限られた時間の中でどのように行うのか。また、音読指導で守らなければならない指導順序なども教えてもらいたい。音読のあとに出来る効果的なアウトプット活動を教えて欲しい。
- ・発音や音読指導の効果的な方法を学びたいと思っています。
- ・今後の授業改善に役立てるアイデアを吸収できればと思います。
- ・いろんな音読指導の実践例を体験、活動し研鑽を深めたい。

- ・音読指導の実践例をたくさん知ること。自分自身の発音や発声方法も向上するための勉強法を知ること。
- ・最新の発音指導と音読指導の方法、効果のある音読指導法を教わりたい。(下線筆者)
受講教員にとっては、「適格性の保持」を検証する免許更新認定講習としてではなく、専門性を高める研修として捉えていることがわかる。また、多くの教員が「具体的な指導法を教わりたい」「いいアイデアを教えて欲しい」と教室で明日から使える内容を期待している。いわゆる tips 志向である。こうした傾向は、教育委員会などが実施する研修でも多く見受けられる。

教員のこうした tips 志向は、その場限りの指導の工夫を追い求めることになり、本質的な専門性の向上にはつながりにくい。教材作成の観点や教材の読み込み、授業デザインのコンセプトなど、体系的な教科専門の知識を修得することが必要である。

3. 3 平成 23 年度本学実施の教員免許状更新講習の受講コメントにみる更新講習への意識

講習後の受講コメント（付録に全 65 名分掲載）の中から代表的なものを取り上げる。

- ・日頃の授業において、実際の小さなドリルなどで体験をさせて問題意識を持たせることから、各自が意見を持ち、それがディベートに発展していくのだとはっきり分かりました。
- ・実際に授業の中で使えそうな話題が盛りだくさんでした。他の講習も受けての率直な感想は、講師の先生が準備してくださった資料が非常に丁寧であるというものです。受講生の立場に立った講習でした。
- ・講義はとても楽しく大変多くのことを学ばせていただきました。2 学期からの授業に早速活用させていただきたいと思います。大変有意義な講義をありがとうございました。
- ・本日の三種類の講習はどれも授業にすぐに取り込める内容で、大変勉強になりました。特に N 先生の準備してくださった資料は、2 学期が始まりましたら、すぐに使いたいと思っています。ありがとうございました。
- ・沢山のヒントをもらいました。実際の授業で使いたいことが沢山ありすぎて、それらをどのように授業デザインしていくかが大切であると感じました。私自身が、発音記号の学習をしたことがなく、どのように授業をしていくかなども学習したことがありませんでした。この 2 日間の研修は非常に実りあるもので、とてもありがたかったです。自分の勉強不足を感じました夏休みはもっと時間を作って教材研究と自分自身の知識を上げていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・午前中の音声学は日頃から自分の発音に自信のないところもあったので、再び勉強できてよかったです。最後の時間のテキストを使つての L/E/A の勉強は難しかったです。午後の授業は、十分なテキストを用意してくださり、また、実際の授業に役立てることができるよう教材を作っただけで本当に良かったですです。ありがとうございました。

した。

- ・今回も、とても楽しく、実際の授業で使ってみたいと思わせるものが沢山あり非常に勉強になりました。この免許更新講習はできれば、すぐに役立つような実践的なものを沢山紹介していただけると、とてもありがたいです。(下線筆者)

本質的、体系的な指導法を学ぶことより、実際の授業の臨場的な指導のあり方を求める要望が多いことが読み取れる。本来、免許状更新講習は、教員としての資質能力を備えていること確認することが第一義で、免許更新を認定するのがその趣旨ではあるが、ここにあるように、明日から使える指導教材や指導技術、実際に役立つ内容・項目を講習されることを願う思いが強い。学校教員が求める実状は、「資質の向上」「資質の加算」といった修辭的に表現されるものでなく、日々の授業の構築に苦心する切羽詰まった状況の改善tipsの入手であるように思われる。補遺掲載のコメントに見受けられるように、発音指導や発音の仕方など英語教員としての基本技能を教員養成課程で十分習得されていないこともうかがえる。「教員の資質能力の向上」を図るには、教授法や語学など英語の体系的な専門知識の充実もさることながら、実際の授業をどのように組み立て具体的にどのような活動で指導を行っていくのか、ブレイクダウンした内容を取り扱っていかなければならない。

4. 実際の授業

4. 1 第5回学習基本調査（ベネッセ）から

ベネッセが2010年8月～9月（調査期間）全国の公立高校の校長および教員〔校長830名（配布数2,000通、回収率41.5%）教員4,791名（配布数12,000通、回収率39.9%）〕に行った公立高校における学習指導の実態と教員の調査報告書の巻頭言に「学力保障の時代における教育課題」として、まず、「子どもたちに身につけさせようとしている学力の質」に対し、小・中学校ともに、「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」が8割近くを占め、「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」は4～5割にすぎず、「探究的な学習」は2割前後にとどまることをあげている。活用・探求型の授業が今後求められている割にはその実施率が低いことを危惧し

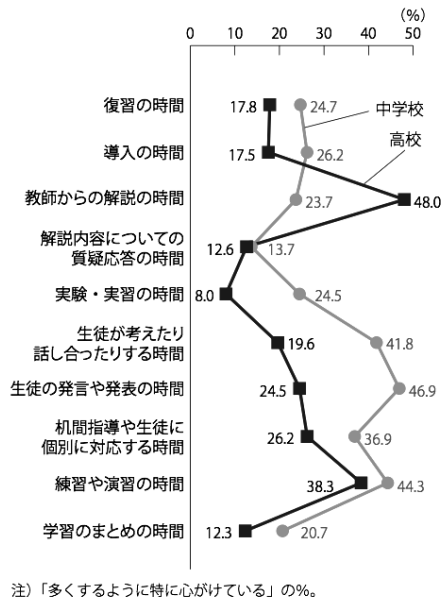


図1 授業の時間の使い方や進め方【教員調査】
(中学校・高校別) ベネッセ (2011)

ている。また、大きな課題として「教員多忙化の加速」をとりあげ、週末の土日の出勤率が高く、「教材準備の時間が十分にとれない」という教員が、中学校で8割強、高校で6割5分に及ぶとしている。日々の忙しさに悩みを感じる教員が多いということである。これで教育の改善がもとめられるのだろうか。

中学校と高等学校の接続も大きな課題である。教育内容を異にするので、授業での指導方法が一定変わることは当然であるが、あまりギャップがあると生徒は戸惑うことにもなる。本調査では図1(P.165)のように、「授業の時間の使い方や進め方に」差異が見られる。この表は「多くするように特に心がけている」項目の集計比較である。特に「生徒が考えたり話し合ったりする時間」「生徒の発言や発表の時間」を心がける比率にギャップが見られる。中学校の方が「生徒が主体的に学習に参加する」ように心がけているように思われる。高校でも「まあ心がけている」を併せると80%を超えるのだが、「特に心がけている」という意識は高校では低い。新学習指導要領では、「英語Ⅰ」などが「コミュニケーション英語」と科目名変更されている。こうした時間が少なければ、科目変更が求めている成果をあげることは難しいであろう。「教師からの解説の時間」が多い高校の伝統的な教養教育を意識した授業スタイルは変化を求められていくことになる。そうした意識改革を現職の教員に持たせることが最も望まれることかも知れない。

図2にあるように、高校の教員は受け持つ生徒の学力の低さを悩みの大きな要素としてあげている。これは大学教員が、入学生の学力の低さを嘆く構図と同じである。ベネッセの調査では、同じ項目での中学校教員の調査は行われていないので中高の比較は出来ないが、学力や学習意欲の低さを課題としてあげても、課題の解決にはつながらない。結局、目の前の生徒に向き合い、どう力をつけていくのが大きな課題となる。

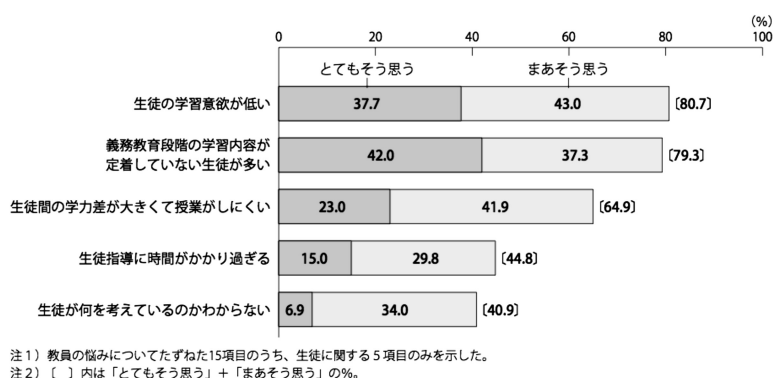


図2 生徒に関する教員の悩み【高校教員調査】(全体) ベネッセ(2011)

図3は高校教員の授業の方法を尋ねたものである。おそらくこの中で、「自作プリントを使った授業」や「教材を工夫した授業」が、目の前の生徒に応じた授業での指導につながるであろう。問題はその工夫である。これは一人で背負い込んで考えるのではなく、教科の教員で共有して考える同僚性とその発展の大きな要素であることは間違いなく、

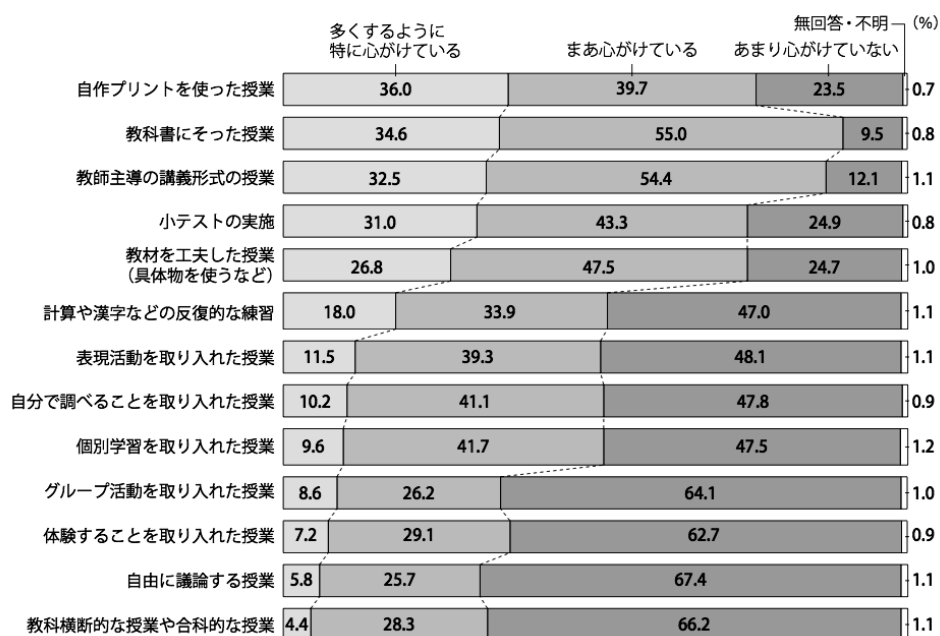


図3 授業の方法【高校教員調査】(全体) ベネッセ(2011)

4. 2 「英語の教え方教室」勉強会で話された英語授業の考え方

これまで2010年5月から2011年7月までで10回の勉強会を学校現場の先生を対象として「英語の教え方教室」を実施した。他の英語教育研究発表会とは異なり、発表の途中でポイントを絞って参加者と話し合ったり、参加者からの発言を元に発表をきめ細かく説明してもらったりするなど、形式にこだわらず自由に話し合うことを旨としている。ここでの話し合いは、学校現場の教員にとっては、日常英語指導上抱えている問題やそのまま話せることを第一としている。予め設定されたテーマで発表するのではなく教員自身が日常抱えていることや試行錯誤の活動内容の提供である。ベネッセの学習意識調査に加えて、事例は少ないが学校教員の直接の発表内容を紹介し実際の授業を検討する。内容紹介は発表者の考えとして全発表者の承諾を得て校名・名前を記載する。

表3 第1～10回「英語の教え方教室」勉強会実施内容

第1回	「英語Ⅰ：生徒が主役の授業をめざして」 「清水谷高校での英語授業」	大阪府立日根野高等学校 大阪府立清水谷高等学校	戸山 令子 富永 重夫	教諭 教諭
第2回	「私のこれまでの授業実践」 「授業おけるルールと生徒指導、ペア学習、他」	大阪府立天王寺高等学校 大阪女学院大学	山崎 陽子 中井 弘一	教諭
第3回	「ビデオによる授業研究」「授業研究デザインシートや授業自己診断シート」			
第4回	「英語の授業は英語で行う」について考えるべきこと			
第5回	「私の授業実践」	門真市立第五中学校	北川 早衣子	教諭
新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料(中学校)				

第 6 回	「私の授業実践」	大阪府立寝屋川高等学校	北村 浩子	教諭
	新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料 (高等学校)			
第 7 回	「グルー基金米国大学視察報告」	大阪府立清水谷高等学校	富永 重夫	教諭
	新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料 (高等学校)			
第 8 回	「元気がでる・やる気がでる英語授業」実践報告	枚方市立第 2 中学校	岡 順二	教諭
	「明日からの授業実践のために－英語授業の哲学－」	大阪女学院大学	中井 弘一	
第 9 回	「中学校・高等学校の英語教員に元気を与える教育実践」	大阪府教育センター・カリキュラム研究室長	蛭田 勲	
第10回	「英語を教えて 28 年…私の授業点描」	大阪府立阿倍野高等学校	喜多 千穂	教諭

戸山は、高校生の課題や気質をしっかりと見据えて、授業の組み立てを考えていくことが大切であるとし、生徒の課題として①自分に自信がない（間違えることを恐れる）②理解できるまで自分で考える習慣がない③点数がとれる生徒でも、英語をうまく読めない、と 3 点を挙げる。また、生徒の潜在能力として①コミュニケーション能力がある。（誰とでも、仲良くなろうと努力できる）②おもいやりがある。（自分のためよりも、友達のため方ががんばれる）③やる気がある。（やれば力が付くと分かると、時間をかけて考えることができる）を挙げ、授業へのレディネスを確立するため生徒にかっこ内の約束事を取り決め授業に臨んでいる。「身に付ける能力は、How to teach yourself. その力を身に付けるために守るべき 3 つのルール、Be here. Be ready. Help each other.」指導法云々の前に、確固とした授業への姿勢を持つことが大切であると述べた。

富永は、最近、どの学校においても授業の補助プリントが欠かせなくなっており、情報などが溢れる時代にあって、漏らさず教え込むということが何となく求められるようになってきていると指摘。授業時間が限られている中で、大切な事を漏らさずチェックすることと、重要事項を生徒自らが気づくように考えさせる工夫として、様々な質問を用意することの必要性を説く。

山崎は、これまで赴任した高校における授業設計（デザイン）の違いや授業を設計・実践する上で大切であると考えた基本概念と実践事例を発表。授業設計での指導理念は、高校卒業後も英語学習が続けられる基礎づくり（興味・関心を引き出し、“英語好き”な生徒の育成）であると述べる。そして、a) 音声を重視する b) 英語がコミュニケーションの手段であることを意識して All English in Class、リアルな例文提示＋自己表現練習、ミニ・トーク in English、Authentic Materials（新聞・雑誌、インターネットなどの記事）を扱うことを心がける。c) 予習の補助で、だれでも参加できる授業づくり d) 英語力が定着するようにアウトプットの機会を多くする の 4 点をモットーに授業に臨むことの必要性を述べる。

北川は、チャンツを使った音読活動に対しては、元気よく声を出す生徒もおり、それに伴って消極的な生徒も声をだすことができ比較的積極的に取り組むこともあるが、英語を正しく「書く」ことに対しては苦手意識が根強く、声に出して言えるのに書けないという状況が担当クラスに見受けられる。他のクラスにも見られる現象である。そうした場合、

学力面に不安があったり学習意欲に欠けたりする生徒も見られる中で、自分が「お姉さん」というより「お母さん」になったような気持ちで生徒に接し、日々の授業に取り組むという生徒との人間関係の構築の重要性を発表。特に力を入れて指導していることとして、「チャンツ」「ノートづくり」「授業進行のパターン化」「スピーキングでの工夫（電話会話）」を取り上げ、一定の型を持つ授業進行が「安心感のある授業」の構築につながるという指摘であった。

北村は、前任校の授業では、生徒が予習として行った和訳を授業中に確認することが中心で、英文の訳を一文一文確かめる等の精読中心の授業であったため、生徒が英語に触れる量は非常に少なく、日本語による教員主導の授業形態で、授業中に生徒が英語を使用することはほとんどなかった。現任校では、授業中に生徒が触れる英語の量が圧倒的に増え、オーラル・イントロダクションや口頭の英語の質疑応答、表を用いた内容の整理、音読活動の強化、サマリー・ライティング、意見構築からディスカッションへなど様々な活動を行い授業の充実を図っていると対象生徒によって授業の方法が大きく変わることの現実を述べた。教育課題として、最近の生徒は塾での学習の影響が強く、塾に通っている生徒は、塾の学習法に引きずられ、問題演習型を望む生徒が多い。入試問題をやると生徒は落ち着いて熱心に取り組む。高校の授業料が無償化になって、その浮いたお金で塾に通う生徒が一層増えた。入試問題とつながらないことをやると内職をする生徒が生まれることもあるなど教育の断面を指摘した。

岡は、元気溢れる授業の様子を紹介するとともに、そうした授業デザインの基本コンセプトとして、「入試に対応できる英語力（家庭からの信頼）」「自分が楽しい授業（時間が早く過ぎる授業）」「生徒が主体」「ペア・ワーク活動を中心に」「音読→暗唱→暗写の徹底、そこから自己表現へ」「メリハリがあり、パーツを多く」を挙げる。そのためには、①生徒の活動を多くする②スピーディーに行く③継続して行く④生徒に暇を与えない⑤様々な活動を用意する⑥音読は中学生の英語学習の要（学びのウオームアップ）⑦目標・ハードルを高くして、チャレンジさせ、その達成感を持たせる活動を行うことが重要である。英語をスキル・サブジェクトとしてとらえ、さながら体育の授業のような授業運び・授業のスタイルー「1時間をいくつかのプロセスに分け、教師の簡単な説明・モデル説明の後に生徒がペアやグループごとに活動しながらその技術を習得していく。一つのプロセスが終われば次のプロセスへ移る。教師は各ペアやグループに時に寄り添いアドバイスする。」が授業の大きな流れである。実技科目として、1時間を構成し、生徒が活動しやすい補助を事前に考えて用意することがこの授業スタイルのキーである。経験に基づく指導理念をもとに行う授業デザインの例示であった。

蛭田は、ラーニング・ピラミッドを提示し、学習が定着するには、「知識」の提示に終わる講義形式でなく、「心を動かす体験」、そして学んだことを人に伝える「言葉の力を持つ」ことが何より大切であると指摘。「魅力ある授業」への提言として、①「こころ」が動く授業、②「ことばの力」が育つ授業、③「成長」が実感できる授業の三項目に集約する。中学校・高校では、この「こころ」を打つ授業、「成功体験」与える授業が残念ながら

ら少ないのではないかと課題を明示した。小学校の授業は、たとえ小さな「成功感」であっても、少しでも多く成功感持たせようとする工夫と献身的な取り組みがうかがえる。何度も参観した多くの小学校の授業には、涙が出るほど「感動を覚える授業」、「こころを揺さぶられる授業」が数多くあった。中学校・高校の教員はそうした小学校教員の姿勢から学ぶべきものがある、心を育てることばの授業こそが命であると提言があった。そこで、単調なことを楽しく考えて活動させる小学校教員の工夫のいくつかを参加者に体験させるように紹介した。

喜多は、28 年間の教員生活を振り返り、「教材とどう向き合うか」「授業での言語活動をどう進めるか」「テストはどう作成するか」などを話した。参加者の方から、「3 種類のノートを作成させている。「授業ノート」：授業で聞いたことをまとめる。「清書ノート」：教科書やまとめたことをきれいに書かせる。「自由勉強ノート」：自分で教科書外でも勉強したことを書かせる。これらを定期的にチェックしている」との発言や「テスト作成は 1 週間前までには作るべき、共通テストであるので他の人と確認すべき」「はじめにテストを考えて、授業をする事はない、回答を覚えさせるようなことになる」などの意見が出た。「先生は何を一番大切に考え、授業に臨んでいるか」の問いには、「自分仕様の英語の学び方を身につけて欲しい」「やって楽しかったと思って欲しいと考える」「英語の文章から様々な知識を得てもらいたい」「卒業しても英語を自分なりに学んでいこうとする姿勢を築きたい」「生徒に一定の成果がある結果につながるようがんばりたい」「単にスキルとして教えるのではなく、言葉は文化であることを踏まえ、その文化による考え方の違いを意識させたい」自分の内面に興味を持つようにさせたい。それが全体の中の自分を認識し、自然に英語に取り組ませたい」などの意見が参加者ら出た。

ここでの発表は、授業に臨む姿勢から細かな指導事例など学校教員が実際に意識し実践していることである。その発表を参加者全員で話し合ったり、紹介された活動の疑似体験を通して、指導活動の意図やねらいを体感的に確認したりしている。参加者に一つ一つの活動が持つ意味・ねらいを再認識することが、筆者の感想ではあるが、勉強会の機能を果たしていることにつながっているように思える。実践発表した教員は、自分なりの指導方針やこう指導したいという信念を有している。ただ、目の前の授業の実践に迫られている感はなくもないものがあつた。自分なりの指導方針を基に、教材を分析し、どのように授業を進めて行くか、その基盤となる指導概念を体系的に修得し授業をデザインする統合した力を養成することが、「教員の資質向上」に一番大切なことでないかと、回を重ねるごとに実感した。実践的な内容でしかも体系的な概念を得ることで、指導において更なる工夫が生まれるのではないかと。

5. 英語科教員の成長と資質能力の向上

5.1 授業デザイン力

教員の成長には、指導概念や専門知識を基に授業を構成しているものを把握し、豊かに

授業をデザインする統合した力が欠かせないものとして、何がその中で重要な要素となるかを考える。

授業を構成しているものとしては、「生徒」「教員」「教材」「環境」「カリキュラム」などをまず挙げることができるが、その本質として、教員が生徒に何に気づいてどのように学んでもらいたいと願っているか、当該の授業に対する教育的姿勢が明確であるかどうかが重要になる。この「願い、思い」が明確でない教員は、授業の質的な向上は望めない。この「願い」があって、それぞれの授業の明確な目標が生まれる。教員免許状更新講習の受講者の中には、そのことを踏まえず明日からの指導技術を求める傾向がややあった。次に大切なことは、「生徒の実態」の把握である。生徒の状況を踏まえた上で、上述の岡のように、「暇を与えない、テンポある授業」を心がけるという授業姿勢が生まれる。生徒は一律ではない。英語を苦手とする者も得意とする者もいる中で、瞬時の「教育的瞬間」(pedagogical moment)として適切な対応が求められる。「間」(wait time)も必要な場合がある。

こうした教育場で、様々なことに対応しながら授業を進めるには、授業をデザインする力がなければ成り立たない。これが教員の資質向上の大きな鍵である。授業は、「計画」を立て、「実践」し、「チェック」「改善」という PDCA マネジメント・サイクルの形式的な過程を進行するだけではうまくいかない。多様な考えを持つ生徒がどのような反応するか分からず、計画どおりに授業が進行することはそう多くない。秋田(2007)は、授業はテーマをめぐって展開されるコミュニケーションを通して、参加者間で認識が共有される過程と捉え、教員の仕事を「テーマを設定する」「コミュニケーションを組織する」「認識を共有する」という3点からみることを説いている。

「テーマを設定する」は授業の出発点でもある。教員免許状更新講習や勉強会の参加教員ですぐれた教員は、授業で何をねらいとするか指導理念を持っている。そしてその理念を具現化するにあたって、「教材の読み込み」が十分であることがうかがえる。教材をしっかり読み込み、その内容と英語のおもしろさを捉えることができはじめて、生徒にその教材から何を学ばせたいかテーマを設定することができる。教材が有する教育的価値をどう味合わせるか、深い思いを教員は持たないといけない。その上で、生徒の実態と合わせて「目標」を設定することになる。それでも実際の授業になると、生徒の実際の反応に戸惑うこともある。それには「授業内での省察」(reflection in lesson/on activity)を基に対応する資質能力が求められる。

「コミュニケーションを組織する」は、教員と生徒とのやりとりや生徒同士のやりとりを通して集団における関係をつくることである。教員の発話は授業展開の鍵である。1時間の授業で数百回にも及ぶやりとりで、設定されたテーマの追求を行う。教員の発話には、「問いかけ(発問)」「語りかけ」「言い回し」「連続性」「問題への焦点化」「集団対象・個人対象」など様々な要素が絡み合う。生徒が参加したいと思う授業は、まちがいを恐れる、英語の力がないと思われることを恐れる、また批判されることや少し難しいことに挑戦することも恐れるといった不要なストレスを感じさせない「安心感のある授業」である。こ

れには生徒個人の教室での存在感が大いに関わる。こうしたクラスでの関係は教員・生徒や生徒同士のコミュニケーションによって生み出される。したがって、指導者である教員のコミュニケーション能力は資質能力として欠かせないものである。筆者は授業コミュニケーションとして、昨年高校生に授業での教師のコミュニケーションとして効果的な話し方を調査した(中井 [2011])。その中で、トップ 5 は、『「たとえば」で具体的な話をする』、『「黒板に図を描いて話す』、『例示して納得させる』、『重点をキーワードにしてくり返す』、『最後のまとめを具体的にする』であった。こうした話し方も能力として不可欠である。

「認識を共有する」は、生徒の学習内容理解に対する認識のみならず、生徒の個性や感情なども共有されて、かみ合った授業進行が生まれることを意味する。「響き合う教室」とも言われるが、それには個々の生徒の理解に応じた課題の解決の方向性を認識しなければならない。フィードバックといわれるモニターとチェック、示唆が生徒の成長を生み出す。それには教員が個々の生徒の課題を適切に把握する認識力と適切なコメントとこれからへの助言を行う能力が必要である。また、個々の生徒に留まるのではなく、クラス全体が共有すべきこともある。

5. 2 教員の成長と省察

こうした授業デザインに必要な能力は、教科や教材に対する深い知識である。とくに、授業を想定した教材内容の知識 (pedagogical content knowledge) が不可欠である。グロスマンは、この知識を構成するものとして、「生徒の理解に関する知識」「カリキュラムに関する知識」「授業の方法に関する知識」の 3 つを挙げている (Grossman [1990])。

現職の教員は、日々の授業を通して一定レベルこうした知識を保有していると思われる。にもかかわらず、教員の資質向上が叫ばれる。熟練の教員と新任の教員とではその知識量が異なるのであろうか。確かに新採・新任教員には技術的な未熟さがあるかも知れないが、資質向上が必要だと求められるほどの差は無いと思われる。

差があるとすれば、教材や指導課題のとらえ方そしてそのとらえ方の深さ、全体を見通す力に差があるのではないだろうか。中学校においては、若い教員より年配の教員の方が生徒と伴にいる時間が多いと勉強会参加の中学校の教員から聞く。生徒の立場にどれほど寄り添って授業をデザインできるかは、授業の展開に大きな影響を持つ要素であろう。確かに、日々の雑務に追われ、グロスマンの 3 つの知識を統合的に効果的に発揮できないこともあるかも知れない。とはいえ、教員は成長しなければならない。

成長する教員は、第一に、生徒にプラスになる方向で活動を考える。そして自分の実践活動を常に振り返って省察する習慣がある。それらが豊かな視点を育成する。そうした視点があるから、教材に対する教育的価値の位置づけを行い、一人ひとりの生徒の学習実態やクラス全体を見通し、今後の指導の展開や方向をイメージできるのである。ただこうした成長は、独りでに生まれるものでもない。教員同士の交流・同僚性が必要である。筆者は高等学校の英語の授業の指導助言に赴くことがあるが、最近、教員の同僚性は薄れているのではないかと感じることもある。その点は課題である。

英国では、右写真のように TDA (the Training and Development Agency for Schools) の Professional Standards for Teachers Why sit still in your career? と教員の資質能力の基準を設定し、教員の資質能力の向上を図るチェック表が職員室に掲示してある。全ての教員に求める資質能力の基準を3分野に分け、一つ目は“Professional attributes”として Relationships with children and young people, Frameworks, Communicating and working with others, Personal professional development を、二つ目に“Professional knowledge and understanding”として Teaching and learning, Assessment and monitoring, Subjects and curriculum, Literacy, numeracy and ICT, Achievement and diversity, Health and well-being をそして三つ目に“Professional skills”として Planning, Teaching, Assessing, monitoring and giving feedback, Reviewing teaching and learning, Learning environment, Team working and collaboration を設定している。教員は TDA のサイト <http://www.tda.gov.uk/> を通して teacher training のアドバイスを得たり、授業の診断を得たりできるようになっている。また、“Strategy for the professional development of the children’s workforce in schools 2009–12”というガイドを提供している。紙面の都合もあり本稿で詳細を述べることは控えるが、こうした自分の授業を振り返りレビュー、リフレクション（省察）することは教員の資質向上を図る外因的な施策よりはるかに有効であると考ええる。教員が自分の授業を自分で振り返り、自分で考えるシステムが日本ではやや不足している。

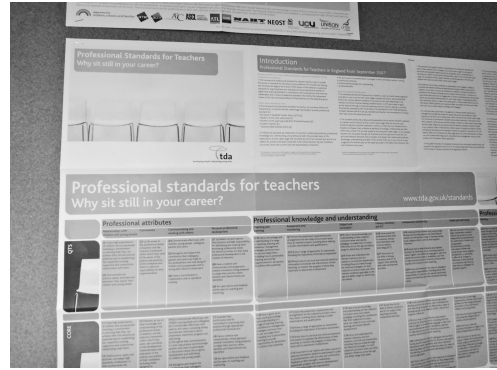


写真1 英国ヨーク Manor CE School の staff room の掲示版（2011年9月15日撮影）

したがって、教員研修や教員免許状更新講習においては、単に理論を講習するのではなく、学校現場に活かされるよう、具体的な内容を基に、さらなる授業デザイン力の育成をめざし、教員が自ら気づき成長することにつながる講習を行って行かなければならない。授業と同様で、押しつけられたものはすぐに忘れるものである。教員研修や教員免許状更新講習を実施する大学はこうしたことを常に意識して講習を行わなければ、成果は上がらないだろう。研修とは「研究」と「修養」を併せた言葉である。教員のさらなる人格的な成長も必要であることは言うまでもない。

6. まとめ：教員養成課程の今後の指導の方向

教員養成課程のあり方が見直されようとしている今日、教員養成系の大学では、実践を踏まえて、「教科内容学」といった教材と指導理念、指導内容、指導構成、指導時期などを統合的に学問化する動きもある。教員免許状取得の改正よりも、教員が成長するために、

自らの授業や教育活動を振り返り自らの資質能力の向上を図る「省察システム」の構築が検討されるべきである。

本論の対象である英語教員の養成には、教科内容を的確に理解し、英語という言語の特性を説明できる確固とした英語力が第一に必要である。これには英語の背景にある文化特性に対する知識やグローバル言語としてのコミュニケーション道具観も含まれる。これらに関して観点別に自己チェックできる基準をリストアップし、不足している領域等の知識・見識を深める手立ての紹介ができるようにしていかなければならない。また、学習者である生徒をどのように理解するか、その観点や基準を修得する必要がある。常になぜと問いかけ、予定する活動や実践した活動を省察する力が求められる。列挙すれば数え切れないほどの点検項目・基準項目があると思われる。

こうした英語科教員の養成は大学の座学だけでは不可能である。変化が緩やかであった時代は、教員になってからの成長で対応できたかもしれないが、変化の激しい時代には即戦力・即対応が求められる。それだけに教員養成課程を有する大学は責任重大である。そのため、大学における教員養成課程は現職教育と平行して行われるよう工夫されるべきである。大学は教員研修を盛んに実施するとともにそこに教職志望の学生を参加させ共に学ばせるシステムが求められる。また、昨今盛んになっている学校訪問やボランティア活動を通して教職志望の学生が、学校現場において自分で直に教育を感じる機会を増やすこと、また、教職実践演習にあるように現場の教員を大学に招いて講義を聴く機会を増やさなければならない。また、海外での教職のフィールドスタディを実施し、海外での学校授業を参観したりして教育観を豊かにすることも必要である。

英語科教員としての資質能力を早期に自覚させ、その向上・開発を支援するストラテジー・点検項目を「教科内容学」とともに整理した学生向け自己省察ガイドを作成していくことが、教員養成課程がすぐさま取り組まなければならない課題であると考えられる。教員免許授与というペーパーティーチャーの輩出を目的とするだけで、本気で教員を育てる気概がない教員養成課程は決してよい教員を生み出さない。

引用・参考文献

- Civikly, J. (1992). *Classroom Communication-Principles & Practice*, Wm. C. Brown Publishers
- Grossman, P. L. (1990) *The Making of a Teacher*, Teachers College Press
- 秋田喜代美・佐藤編著 (2007) 『新しい時代の教職入門』 有斐閣アルマ
- 石田雅近・神保尚武・久村研・酒井志延編 (2011) 『英語教師の成長 求められる専門性』 英語教育学大系第 7 巻 大学英語教育学会 大修館書店大修館書店
- 中井弘一 (2011) 「授業コミュニケーション ―教師のことばから教室環境を高めるために―」『OJC 教職活動報告・研究』大阪女学院大学教員養成センター
- 八尾坂修 (2006) 『教職大学院―スクールリーダーをめざす』共同出版
- 八尾坂修 (2008) 『教員免許更新制度』明治図書
- ベネッセ教育開発研究センター (2011) 『第 5 回学習指導基本調査報告書 小学校・中学校版』ベネッセ

ベネッセ教育開発研究センター（2011）『第5回学習指導基本調査報告書 高校版』ベネッセ
TDA（2011）“*Strategy for the professional development of the children's workforce in schools 2009-12*”
<http://www.tda.gov.uk/>

文部科学省（2011）「平成22年度免許状更新講習の事後評価結果」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/004/_icsFiles/afieldfile/2011/01/27/1301850_1.pdf

文部科学省（2011）「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ
意欲と使う機械の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf

朝日新聞朝刊 平成23年8月6日

付録：平成23年度夏季免許状更新講習 受講者からのコメント（のべ65名）

- ・日頃の授業において、実際の小さなドリルなどで体験をさせて問題意識を持たせることから、各自が意見を持ち、それがディベートに発展していくのだとはっきり分かりました。英語のみならず、日々時事的な話題に目を向け、教員自身が問題意識を感じていくことが大切であると思った。
- ・N先生には7月4日の貴学授業公開の際にもお世話になりました。本日も大変興味深い授業をしていただき本当に有り難うございました。
- ・ディベートの概念は知識としてのみ、知っているだけでその奥にあるコミュニケーション・ルールまでの理解にはいたっていなかったもので、新しい考え方を知ることができて、本当にためになりました。テキストも工夫が凝らされていて良かったです。ありがとうございました。
- ・とても盛りだくさんの内容で貴重な一日となりました。N先生、T先生のご熱意を強く感じました。私自身、またいろいろ勉強して今後の授業に生かしたいと思います。今後も、先生方に教えていただければと思います。ありがとうございました。
- ・生徒には常日頃、「論理的に考えてください」と言っているのですが、久しぶりに自分が「考えなさい」と言われると、非常にストレスフルの時間でした。日本人にとって、論理的思考がいかに難しいかと言うことを体感しました。英語を母語としている人と話をしていると、2時間くらいで非常に疲れてきます。日本人がいつまで経っても英語力が付かないと言われていますが、この思考の違いが理由の一つかもしれません。また、これが、私たちが克服しなければならないことでしょう。
- ・年齢とともに言語力、発想力の減退を感じておりました。授業の中にも様々なことを挿入していかなければならないのに日々の忙殺に、つい忘れがちになっている自分を本日の受講で反省しきります。授業の中にも取り込むべきものが多々有り、2学期の授業の中に挿入していこうと思います。ディベートは難しいと勝手に判断していましたが、可能な点が多々有り、とても有益な1日でした。ありがとうございました。
- ・楽しんで受ける事ができました。自分の授業でどのように活用していけるかを考えながら受講させていただきました。英語教師のための勉強会があると知りました。参加してみたいと思います。「自分自身、もっと勉強しなければならない」と改めて感じました。有り難うございました。
- ・実際に授業の中で使えるような話題が盛りだくさんでした。他の講習も受けての率直な感想は、講師の先生が準備してくださった資料が非常に丁寧であるというものです。メモをとることに必死で中身を十分に把握することができなかったという思いが全くありませんでした。また、カラーでわかりやすいという点も素晴らしいかったです。受講生の立場に立った講習でした。また、講師の先生が、この講習にもものすごく時間をかけて準備してくださったのがとてもよく分かりました。そういうものが感じられる熱意のこもった素晴らしい講習でした。大阪女学院大学という大学のあり方というものを感じさせられました。ありがとうございました。

- ・内容が盛りだくさんで、先生方の熱心さがとても伝わってきました。ディベートは苦手な分野でしたので、あえて挑戦してみました。N先生に頭が固いと連発されてしまいましたが、まさにそのとおりで、いかに柔軟な考えを持っていないかということ、すなわち一方的にしか物事を見られていないかを痛感いたしました。「考える」ということ、それが私自身に訓練されていないと思いました。先生がおっしゃってくださったように、まさに「さあ、ディベートしましょう」ではなく、それまでに積み上げておかねばならないことがたくさんあることに気づかされました。ありがとうございました。
- ・コミュニケーションといっても様々だが、国際化が進展し、都市部では昔のような「以心伝心」的なコミュニケーションが図りにくくなってきているように感じる。これは電話やテレビ、携帯メールや電子メール等、様々なツールの発達のおかげでもあるが、それだけ表現方法も多様化している。(言葉といっても文字や声だけでなく、イラストや絵文字などもある)最近の若者の間(?)では、略語なども日常化し、一昔前の意味とは異なる意味や使われ方をしている。それだけに日本人同士でも世代間でコミュニケーションを図るのは難しくなっていると思います。でも、基盤となるのは相手を思いやる気持ち。相手の痛みが分かること。これに尽きるのではないでしょうか。本日は講義ありがとうございました。
- ・非常にエネルギー的なN先生の話術に引き込まれました。時間の割にボリュームが多かったので、もっと詳しく伺いたかった部分がさらっと流されてしまったのが残念です。ペア・ワークでは余り活動的ではなかったのですが、もっと頭を柔らかくしないといけないと痛感しました。ありがとうございました。
- ・今までの講習の中で、とてもアットホームでパワフルな先生方のものと、あっという間に終わりました。とても素晴らしい準備と内容で感謝します。
- ・「ディベートの考え方」は大変楽しい講習でした。言葉を選ぶこと、考える習慣、様々な角度から考えること、相手の言葉を聞くこと、表現すること、改めて大切にしたいと思います。「異文化間コミュニケーション」はもっと時間があればと思いますので、さらに興味をもって勉強していきたいです。時事英語も大変良かったです。もっと詳しく知りたいと思いました。有り難うございました。
- ・講師の先生方の熱意がよく伝わりました。
- ・考える力、表現していく力、発信していく力といった事柄を改めて大切だと認識いたしました。日本人のシャイな良い部分も残しながらも、社会で生きていく素地をしっかりとみ身につけさせてゆくことが大切だと思いました。子どもが学ぶ楽しさ、喜びを、体得できるよう、今後も頑張っていけます。
- ・「ディベートの考え方」「異文化間コミュニケーションの考え方」、ともに良い刺激をいただきました。講習で教えていただいた内容を、授業で使える形にアレンジし取り入れたいと思います。ありがとうございました。
- ・「英語をやるなら女学院で!」と楽しみにしていました。今日はあっという間に時間が過ぎ、とても勉強になりました。講座の中身も勿論ですが、私は個人的にお二人の先生のパワーポイントの使い方に感動しました。ものすごく準備もいることですが、とてもわかりやすかったです。公立中学で、そんなことはないかもしれませんが、いつか私も視覚に訴える授業をしたいです。実はそれが一番勉強したいです。時事英語にも興味がありますので、是非のぞきたいと思っています。どうもありがとうございました。
- ・学校によっては、なかなか生徒が落ち着いて授業を受けられないところもあり、その中でどういう方法で授業をしていくかが課題になっています。ディベートにしても、いきなりその形を求めるのではなく、出来るところから始めればできるのではないかと感じ、トライしていこうと思いました。異文化間コミュニケーションでは、意識していないことを意識させていくことで見えてくるものがあると感じました。
- ・日頃は、生活指導に追われていて、見せていただいたビデオの授業なんて夢のような授業なので、

私たちには現実的ではなかったのですが、生徒とのコミュニケーションを円滑に行うためにも、生徒の思考力を育成するためにも、コミュニケーション・ルールを勉強させていただけてよかったと思いました。ディベートは、英語力のかなり高い高校向けのように感じました。

- ・参加型の講習で、いろいろと考えさせられる場面も多く、楽しみながら勉強することができました。最近では日常生活の中でも、コミュニケーション能力が不足しているためトラブルが起きているケースをよく耳にします。日本語でも英語でも、コミュニケーションを円滑にするために必要な最も大切なところは同じだと思いますが、今回はより効果的にディベートを行う方法などが知れて面白かったです。
- ・非常に役立つ講義でした。自らが抱える課題に対する答えを本日の講習で得ることが出来ました。視点を変えてもの（ごと）を見ることがいかに大切かということを学べたことが何よりも良かったです。今回の講座で得たことを少しでも2学期以降の授業改善に活かせるようこれかもしっかり勉強していかなければと強く思いました。本当に楽しく、内容の濃い講座だったと思います。N先生、T先生本当にありがとうございました。
- ・N先生のご講義は非常に内容が濃く、中身も盛りだくさんで、とても勉強になりました。ただ、時間的な制限が有り、N先生ご自身が内容を端折った部分がありましたので、できれば、丸一日かけてお話しをお聞きしたかったという部分のみが残念でした。
- ・N先生へ——講習は大変面白く受講させていただき、ありがとうございました。Ice breaking activitiesは「ものの見方は一通りではない」と言うことを伝えるために大変効果的に使われていたので楽しく受講できました。いろいろとためになる情報が有り、とても良い感じでした。ディベートは自分も経験があり、大体分かりました。ただもう少しゆっくりじっくりと聞けたらなあと感じました。内容がありすぎて、少し消化不良の感じです。T先生へ——ありがとうございました。D. I. E. の考え方は自分にとって新たな発見でした。これからも自分の授業でこのようなanalyticalな視点を持って活動を組み立て定期対と思います。
- ・大変興味深い講義ありがとうございました。先生方はお二人とも熱意の塊みないな方で、そのパワーに圧倒されました。楽しかったです。明日の講義が定員オーバーでとれなかったことが、ただただ残念です。本当にありがとうございました。
- ・受講してほんとうによかったと思います。学校によって工夫は要るでしょうが、ディベートは4技能をフルに使った授業になることがよく理解できました。今回学んだことを頭にベストを尽くしたいと思います。異文化理解も大変役に立ちました。DIE とくに気をつけたいと思います。ありがとうございました。
- ・N先生の講義はとても楽しく大変多くのことを学ばせていただきました。2学期からの授業に早速活用させていただきたいと思います。大変有意義な講義をありがとうございました。
- ・N先生、T先生、今日は本当にありがとうございました。昨年も受講させていただき、今年も是非受講したいと思っていたので、受講できて感激いたしました。（明日受講できないのが本当に残念でしかたありません）昨年、今年と非常に有意義で濃密な時間を過ごすことができました。1日では足りません。もっとお話しを聞きたいです（笑）。ここで学んだことをこれからももっともっと勉強したいという欲求に駆られました。案内状を毎回いただきつつ、いつも仕事で参加できてなかった勉強会、今年は絶対たくさん参加したいと思います。本当にありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。
- ・最初は教員免許状更新講習という理由だけで必要に迫られて申し込みました。高校が母校なので、久しぶりに女学院で勉強できるという嬉しい気持ちもあったのですが、授業内容についていけるのが不安でした。しかしN先生もT先生も具体例やクイズ、ビデオ映像を取り入れてくださり、難しいテーマをわかりやすく講義してくださいました。堺の教育現場では、なかなか落ち着いて学習に取り組める環境ではないのですが、今日受けた講義で子どもたちに、why? と投げかけをたくさん行い活かせるところは活かして授業に取り組んでいきたいと思っています。N先生のクイズ形式の資料、是非使わせていただきます。N先生、T先生長い時間ありがとうございました。

- ・コミュニケーションをとることは、人とつながる豊かさを知ることだと思います。英語は外国の人々や文化を知るのに必要な言葉。今の日本の教育は格差を広げ（能力別クラスなど）豊かに学びあえる場所ではありません。フィンランドでは少人数クラスだし、その中で勉強ができる、できないという概念はなく、子どもたちどうしが学び合い議論もし、育ち合っています。「子どもを急がせてはならない」という法律があるのも興味深い。子どもが強制されることなく、自分の言葉を持ち、育っていくのです。コミュニケーション力を高めるには、まず日本の教育体制を根本から見直し、競争を一切持ち込まない教育を実現させないといけないと思います。こんなにコミュニケーションのことをちゃんと考えておられる先生方が報われますように。
- ・2日目の「発音指導の見直しと音読指導の方法」に興味を持ち、申し込みをさせていただきましたが、本日のご講義内容も豊富な資料、幅広く深いご教授、大変勉強させていただきました。「参加型・体験型」のご講義で、四苦八苦しながらも多少は頭と身体を使う良い機会になりました。励ましていただいている中、受け身的な受講態度で失礼しました。
- ・勤務校の実態に合うものでなく、いろんな教え方や実例を知りたくて受講した。そう考えると私の現状とミスマッチで、少し考えにくいテーマやタスクがハードでもあった。けれど、これはこれで私のレベルアップと自分の気づきになった。このテーマを是非現場で活かしたい。ただ、今の現状を打破したいと思って受講している者ばかりでないことも考慮してもらいたかったなとも思った。内容が盛りだくさん過ぎて考える間がなく、頭の上をいろんな考えや説明が通り過ぎていったなという感もある。また、コミュニケーションをとったりペア・ワークやグループ討論は、まずお互いを知ってこそ出来ると思うので、全く知らない人の中では自分の意見を述べたり、質問に答えたりするのは難しいのではないか。一気にとばして早急にやり過ぎたような感じがした。
- ・「ダイアートの考え方」「異文化間コミュニケーションの考え方」を受講して、大変良かったです。集中でき、あつという間に時間がすぎました。普段、このような機械がなかったので、今回受講してもっと取り組み学んでいかなければとやる気をいただきました。ありがとうございます。
- ・本日の三種類の講習はどれも授業にすぐに取り込める内容で、大変勉強になりました。特にN先生の準備してくださった資料は、2学期が始まりましたら、すぐに使いたいと思っています。ありがとうございます。
- ・三人の先生方の熱い指導に、今後へのエネルギーをいただきました。＜午前中＞説明が多く、もっと練習する時間がほしかったです。タイトルから予想していたのとは少し違いましたが、とても勉強になりました。＜午後＞シャドウイングは改めてこうして教えていただけると、仕組みや基本的な方法を理解でき、大変良かったです。1時間と言わずにもっとお話を聞かせていただきたいかったです。笑顔やお話の仕方からN先生のお人柄や生徒への思いが伝わってきました。様々なアイデアもとても勉強になりました。ありがとうございます。
- ・昨日に続けて受講させていただきましたが、とても内容のある講習でとても勉強になりました。受講料も安く、お菓子などの配慮までいただき、大満足の講習でした。午前中の授業は、中学生には少し難しいかもしれませんが、自分自身の勉強になりました。いかに曖昧な発音をしていたかを教えていただきました。午後からの授業も、盛りだくさんでもう一度資料を見て復習したいと思いました。音読指導では、早口言葉や様々な教材を教えてください、大変参考になりました。教科書をいかに楽しく音読させるかを今、試行錯誤中ですので、もし新しい案がありましたら、是非教えてください。2日間、大変お世話になりました。
- ・以前と比べて、教科指導以外のことで追われている生活です。帰宅時間は遅くなり、夕食を9時に摂るような生活です。精神的にゆとりを持ち、教材を探したり練ったりすることがしにくくなっています。しかし、本来、自分自身、英語が中学時代から好きであったわけで、その英語の魅力、英語学習の楽しさを生徒に伝えようと心がけるべきだと今回反省させられました。3人の先生方の英語に対する「愛」「愛着」を知り、以上のように今感じております。先生方ありがとうございました。
- ・日頃の授業では、英文の内容理解や文法の修得練習に追われています。音読の効果を実感してい

るのですが、なかなか生徒に音読に対するモチベーションを持たせることができませんでした。今回の研修では、いろんな楽しい方法で音読させることができるとわかりました。楽しいと生徒も前向きに音読をするようになると思います。発音や英語のつながりの指導の不足しがちなので、リスニングの際に知っているはずの英語がわからないということが起こりがちでした。重点的に指導して、自然な英語が使えるようになってほしいと思います。

- ・発音、シャドウイング、音読の指導には日頃から大変興味を持っています。是非とも受講したい講義でした。これからの授業に活かしていきたいと思います。N先生の温かく楽しい授業は時間を忘れてしまいます。盛りだくさんで時間が短いのが残念でした。大阪女学院の講習を選択してよかったです。ありがとうございました。
- ・大変盛りだくさんの内容で、三名の講師の方が、どれだけ熱意を込めて準備してくださったか、よくわかり感謝しております。特に発音の基本については、自分自身が学生の頃や後の研修等で習いはしたものの、未だにはっきりと区別をつけながらあるいはポイントを正しく身につけて発音できているかと言えば、決してそうでなく、苦手なところは克服できないままです。今回の講習で、様々な点での熱意をもう一度取り戻し、授業にしっかり取り組みたいと思いました。ありがとうございました。
- ・生徒を教える立場として、一応の知識は身につけているつもりでも、環境の変化、情報、教材等の発達により常に学ばなければならないことは多くあり、特に発音指導、音読指導は大切で楽しくあるべきという趣旨に沿った刺激的でためになる講義でした。ありがとうございました。勉強します。
- ・普段、自分の唇の形を意識して、発音するのにこれほどの時間をかけないので今日はとても勉強になりました。音と音のつながり方、脱落等についても日頃はそんなに意識していなかったので、学習できてよかったです。午後からのシャドウイングの講義はこれまでしたことがなかったので、いいヒントになりました。中学校でも試してみたいと思います。N先生の講義は、盛り沢山すぎて、この時間内で受けるにはちょっときつかったです。もし機会があれば次回はもっとじっくり、ゆっくり受けたいです。この2日間どうもありがとうございました。
- ・なかなか忙しくて研修に参加できない（あるいはしない）ので、非常に刺激になり勉強になりました。発音指導も丁寧にはしておらず、教科書を読むだけだったので、これからは連結等注意させたい。また、N先生がおっしゃったように、教科書を離れておもしろい教材を使う方が意欲が湧く。映画の一部を取り入れる等、まねはできないが音声はCD等で流すことができるので少しでも取り入れたい。
- ・発音指導では、生徒がよくひっかかる音のつながりを教科書本文を通して、勉強させていただいたことがよかったです。発音記号を本文の下に表記してあったのも工夫されていて指導しやすいと思いました。あとは、参加教員の発音のチェックに時間もあればよかったと思います。シャドウイングに関しては、理論というよりは体験型で展開していただきたかったです。最後の音読の講習は、もっと時間があればいいと思うくらいあっという間でした。いろいろな指導法を紹介してくださってありがとうございました。
- ・遠い昔、大学時代に行ったことはほとんど忘れていましたので、初めて学習したことがごとく、新鮮な驚きの連続で、ワークショップを受講させていただきました。生徒達への教科指導に役立てるのはもちろん、自らの大変よい研修になりました。N先生のご講義では、沢山、授業で使える材料を惜しみなくご教授くださり、本当に、「得」をした気分です。ありがとうございました。
- ・午前の講習は、講師の先生の徹底したプロ意識に圧倒されていました。これまで疑問に思っていたものの、ALTに尋ねてもあまり要領を得なかったことにも明快に答えてくださって、今後の指導に活かすことができると思います。午後のテーマではシャドウイングではできれば実施してみたかったので、とても参考になりました。音読指導に関しては、これほどまでの資料を用意してくださった熱意に頭が下がります。とても楽しい講習でした。どの先生もすばらしく、本当にありがとうございました。教師としての姿勢も学ばせていただいたと感激しています。

- ・ 講習 1 に引き続き 2 日目であったが、また沢山のヒントをもらいました。実際の授業で使いたことが沢山ありすぎて、それらをどのように授業デザインしていくかが大切であると感じました。私自身が、発音記号の学習をしたことがなく、どのように授業をしていくかなども学習したことがありませんでした。免許は通信で取得しました。この 2 日間の研修は非常に実りあるもので、とてもありがたかったです。自分の勉強不足を感じました。夏休みはもっと時間を作って教材研究と自分自身の知識を上げていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・ native speaker でない日本人英語教員にとって、発音指導は若干、自信のない部分です。今日の午前の研修内容は、大学以来の音声学的授業で、事項での実際の生徒に対するわかりやすい発音指導のとてもよい研修機会となりました。特に、[æ] の音のコツは「目からうろこ」的であり早速指導に利用させていただきます。シャドウイングについても興味深く実践できそうな内容でした。N 先生の研修は、昨日同様、内容が濃すぎてアップアップしそうですが、先生の熱意と創意工夫に触れただけで価値のある研修でした。また別の機会にも、勉強させていただきたいと思える内容でした。ありがとうございました。
- ・ 教員の毎日の授業活動の中で参考にでき、すぐ実践してみようと思うアイデアが沢山あってとても参考になりました。ありがとうございました。
- ・ いろいろ熱心に教えていただきありがとうございました。冬休みや春休みなどにまた今後に活かせるワークショップを期待しています。ありがとうございました。
- ・ 音声学はとても実践的で役立つ内容で、非常によかったです。特に音のつながりを分析して考えてみることで今まで気づけなかったルールを知ることができ、興味深くもっと勉強したいと思います。日本語音声学を学んだので共通点を知ることにより発音指導ができると思います。
- ・ 発音指導を教えていただき、大変役に立ちました。自分では発音できても、生徒にどのように教えてればいいのかかわからないことが多かったのですが、沢山ヒントをいただきました。
- ・ 3 月に受講させていただき、勉強になりましたので、8 月、またお世話になりました。特に発音指導については自身の課題としているところでもあり、とても本日は勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ とても役に立ちました。講習というより私たちにエールを送ってもらっているんだと理解しました。またよろしくお願いします。
- ・ 昨日に引き続き、今日も十分な準備のもと、有意義な時間を過ごさせていただきました。もっと時間が十分にあれば、意見交換もできより一層充実できたと思う。
- ・ よかったです。発音の方法を学ぶことができわかりやすかったです。
- ・ 午前中の音声学は日頃から自分の発音に自信のないところもあったので、再び勉強できてよかったです。最後の時間のテキストを使つての L/E/A の勉強は難しかったです。午後の授業は、十分なテキストを用意してくださり、また、実際の授業に役立てることができるように教材を作つていただけて本当に良かったです。ありがとうございました。今まで他の大学で必修、選択の講習を受講してきましたが、女学院でも講習が一番ためになり、今後に活かせるものを得ることができました。Listening、speaking があまり得意ではないので、受講するにはとても勇気が必要だったのですが、受講してよかったと思っています。昨日も受講すればよかったと悔いております。有意義な講義ありがとうございました。
- ・ 時間が足りず、もっともっとお話を伺いたかったです。どの講義も内容が濃く、多すぎて（悪い意味ではありません）もっとやりたかったです。先生方の準備のすばらしさ（資料など）も敬服します。＜認定＞どうこうではなく、こういう英語の講習を是非やっていただきたいです。大阪大学大学院の夏の講座（5 日間）というのがあるのですが、それくらい連続で集中できたらありがたいです。本当に勉強になりました。どうもありがとうございました。
- ・ 今回も、N 先生のレクチャーは、とても楽しく、実際の授業で使つてみたいと思わせるものが沢山あり非常に勉強になりました。この免許状更新講習はできれば、すぐに役立つような実践的なものを沢山紹介していただけると、とてもありがたいです。正直、発音体系の説明や専門用語な

どは、実際の授業をやっている教師にはあまり役立たないものだと思います。音のつながり方の分類などをするよりは、実践的な練習をもっとやらせてほしいと思いました。（「ワークショップ」とタイトルにありましたが、あまり実感できませんでした）とはいえ、学ぶことも多かった一日でした。毎回、大変準備されて講習に望まれている先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

- ・ F先生の授業で、学生の発音を沢山聞いたのがよかったです。でも、20題くらいまとめて出されると覚えられないので、4～5題ずつ区切ってやってほしかったと思います。たくさん発声できて、ストレス解消にもつながりました。
- ・ シャドウイングを授業で徹底的に行いたいと思いますし、リズムをとりながら英語をマスターしていく（基本に戻って）必要性を感じました。発音等も少し自分流だったので初心に戻り、勉強できたと思います。
- ・ 英語と日本語の母音体系の差異や子音体系の差異の講義は受けたことがなく、今回、私自身の中でもややしていた点が、明確になり非常に役立ちました。うれしいです。また、様々な授業に役立ちそうな教材を紹介していただき、これも役に立ちそうで嬉しいです。
- ・ 生徒にダイレクトに反映できるかは様々な制約・条件があるのでわかりませんが、私自身は収穫大でした。余計ですが、お茶とお菓子もあって感激しました。女学院へは授業見学で何度かお伺いしましたが、いつもレベルの高い、内容の濃い授業で敬服しています。自分のブラッシュアップをして、それを生徒に少しでも還元できるようにしたいと、いつも考えていますが、本日の講習は本当にstimulatingでした。ありがとうございました。
- ・ プリントの文字をもっと大きくしてください。判読が難しいものがあります。とても熱心で具体的に授業で活用できるアイデアが沢山あって助かりました。苦手な発音クリニックができてよかったです。
- ・ 自分が大学時代に授業で習得し身についていた発音であっても、生徒にどのように言葉で教えるかについては知識がなかったので、午前中の講義は参考になりました。また、ここ数年、自分の授業で力点を置いている音読指導にも多様な視点や方法があることを知り、2学期からの授業の準備が楽しみになりました。心より感謝しています。